# こんにちは牛越です

【第165回】

## 田んぼの水鏡

大町市長
牛越 徹

若葉の緑が日ごとに濃さを増し、水ぬるむ季節となりました。市内でも、先月中旬頃までにすっかり田植えも終わりました。田植え後の水田には、残雪の北アルプスの峰々の姿が、きれいに映り込む水鏡（みずかがみ）が見られますが、日差しを受けて藻が水面に広がるにつれ、この季節の風物詩も消えてしまいます。

そよ風に揺れる苗は、水の中でしっかり根を張り、日光と水、そして土の養分によってどんどん育ちます。遠くに稲光がする頃には穂が立ち始め、9月末には稲穂が実り収穫の時期を迎えます。

一方、米の消費量は、食生活の多様化もあって、全国で毎年約10万トンも減少しており、市では、おいしい大町の米の販路を海外に求め、農業者の皆さんと、市農産物等輸出協議会を設立し輸出の拡大に取り組んでいます。令和元年度にわずか24トンだった実績を徐々に拡大し、今年度は162トンを計画しています。

今年1月、私自身が協議会の皆さんと香港を訪問し、大町の米を大町の水で炊いたご飯で手作りする、おにぎりの店を視察するとともに、新たに、温かいお弁当の自動販売機を開発中の事業者を訪ね商談をいたしました。今後もいっそう販路の拡大に努めます。

ところで、皆さんは「GI信濃大町」という言葉をご存じですか。GIとは、地理的表示のことで、その地域特有の優れた特徴に由来するという産品の産地名を、知的財産として保護するもので、国際的な制度です。昨年6月に、大町の三蔵の清酒が国の指定を受け、今年2月、東京でお披露目の会がありました。

GI信濃大町では、原料米の産地を大町市と松川村の特定の水田だけに限定し、品種も地元の4品種に限っています。

既に長野県の清酒は全体が「GI長野」として指定されており、同一の地域内で二重に指定を受けるのは全国初です。日本酒も国内消費量が減少傾向にある中、大町の地域ブランドを形づくる特産品として、価値がいっそう高まり、消費の拡大につながることを大いに期待します。